



生徒の「なぜ」を育むために 教員はしなやかに変化していこう

三浦隆志 (岡山・県立林野高校 校長)

みうら・たかし ● 1982年より岡山県立高校教員。岡山操山高校進路指導課長、勝山高校教頭・副校長、玉島商業高校校長を経て現職。専門は日本史。進路指導担当時代より多くの調査研究に参加し、アクティブラーニングや授業改善に関する講師を務めることも多数。ワークショップのファシリテーターとしても校内外で活躍している。

新学習指導要領では、新たに「探究」と名付けられた科目や『総合的な探究の時間』が登場します。今後、私はさまざまな学習活動で、探究が重視されていくと考えています。私たち教師は、教科指導はもちろん、教育活動全般で、生徒らが積極的に関与でき、深い理解が進むような指導のあり方や学習環境を準備し、そのうえで「見方・考え方」を働かせ、生徒たちに自信を育み、必要な資質・能力を身に付けていくことができるよう求められています。

このような指導サイクルを回し、汎用的な能力をも含む資質・能力を育成するうえで、探究をどのように意識的に進めればよいのでしょうか。私はいくつか考えられるなかで、教師の「発問力」の向上を取り上げたいと思います。私の勤務する林野高校では、教師が発する「問い」の研究を行っています。

単に知識を尋ねる「質問」から、違った角度からの見方や本質的なものを生徒が紡ぎ出せるような「問い」まで、習得・活用・探究の学習サイクルを意

識した教師の「問い」のあり方が学校全体の研究テーマになっています。具体的には、カナダで開発・実践されてきたICE(アイス)モデルと呼ばれる理論を学習し、その考え方を応用して教師の「発問力」向上に生かそうとする取り組みです。

IはIdeas(基礎知識)で知識や理解の定着を図り、他者への説明を目的とします。CはConnections(つながり)で自己内対話や他者との協働を通じて知識理解や技能を深化させ、物事の全体が俯瞰できるようになることを目的とします。EはExtensions(応用)で知識理解等の統合的な活用を通じて、新たな価値や資産を創り出すことを目的とします。

さらに、本校では教師の「問い」が、授業の場面だけでなく、家庭学習においても意識的に工夫されています。具体的には、ICT機器を活用して、生徒が所有するノートPCに、教師が工夫した「問い」を送信し、提出させるような取り組みを進めています。これらの取り組みで段階的にデザインされ

た教師の「問い」によって、生徒が「なぜ」と考えられるようになり、また、教師が習得・活用・探究の学習サイクルを意識した授業や単元を設計できるようになることが目標です。

本校では、この他に生徒が振り返る力を高める取り組みも進めています。授業の終わりに生徒に「楽しかった」と感想を表明させるのは振り返りになりません。授業の目標を踏まえての「今日のなるほど」とか「どうしてなのか」をリフレクションペーパーやOPPA(1枚ポートフォリオ)シートに表現させ、可視化することで、生徒のなかに「なぜ」を生み出し、次の学びにどう誘うかが重要です。そして、この振り返りを通じて、教師の指導がしなやかに変化し、より豊かなものになっていくのではないかと考えています。

探究の取り組みによって、地方の高校においても、教科学習や総合的な探究の時間や特別活動等の教育活動を豊かにし、これからの社会を切り開いていく若者らに「生きる力」を育むことができると私は確信しています。

